

第77回

休日の午後のコンサート。

9.9 (日) 14:00開演

東京オペラシティ コンサートホール

Sun. September 9, 2018, 14:00
at Tokyo Opera City Concert Hall

〈ふるきを温ね・新垣先生登場〉

Visiting Old, Learning New, featuring Mr. Niigaki

指揮とお話 円光寺 雅彦

Masahiko Enkoji, conductor & speaker

ピアノ 新垣 隆*

Takashi Niigaki, piano *

コンサートマスター 三浦 章宏

Akihiro Miura, concertmaster



chie kt.

スッペ：喜歌劇『詩人と農夫』序曲 (約4分)

Suppé: Overture "Poet and Peasant" (ca. 4 min)

ボワエルデュ：喜歌劇『バグダッドの太守』序曲 (約10分)

Boieldieu: Overture "The Caliph of Baghdad" (ca. 10 min)

モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番より第2楽章 二短調

K. 466 * (約9分)

Mozart: 2nd Movement from Piano Concerto No.20, in D minor, K.466 (ca. 9 min)

— 休憩 (約15分) —

J.シュトラウスII：ワルツ『ウィーンの森の物語』 (約12分)

J. Strauss II: Waltz "Tales from the Vienna Woods" (ca. 12 min)

ケテルビー：ペルシャの市場にて (約6分)

Ketêlbey: In a Persian Market (ca. 6 min)

リムスキー＝コルサコフ：スペイン奇想曲 (約15分)

Rimsky-Korsakov: Capriccio Espagnol (ca. 15 min)

主催：公益財団法人東京フィルハーモニー交響楽団

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術創造活動活性化事業)

Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan



9/9

円光寺 雅彦 指揮とお話

Masahiko Enkoji, conductor & speaker

桐朋学園大学指揮科卒業。指揮を斎藤秀雄、ピアノを井口愛子に師事。1980年ウィーン国立音楽大学に留学しオトマール・スウィトナーに師事。

これまでに東京フィル指揮者(1986-1991)、仙台フィル常任指揮者(1989-1999)、札幌交響楽団正指揮者(1998-2001)などを務め、2011年から正指揮者を務める名古屋フィルとは2018年4月で8シーズン目を迎えている。

NHK交響楽団、読売日本交響楽団、大阪フィル、東京フィルをはじめとするほとんどの国内オーケストラ、海外ではプラハ交響楽団、BBCウェールズ交響楽団、ベルゲン・フィル、フランス・ブルターニュ管弦楽団に客演し、深い音楽性と適確な指揮で多くの聴衆を魅了してきた。またテレビ等の番組にも定期的に出演など、幅広い活躍を続けている。



©三浦興一

新垣 隆 ピアノ

Takashi Niigaki, piano

1970年東京都出身。4歳よりピアノを始める。千葉県立幕張西高校音楽科に進学し、自身の作品をアマチュア・オーケストラが演奏して自分で指揮するという機会を得る。1989年桐朋学園大学音楽学部作曲科に入学。卒業後は作曲家ピアニストとして多岐にわたり活動。作曲家としては現代音楽を主体としつつ映画や音楽やCM音楽の作曲も手掛ける。作曲を南聡、中川俊郎、三善晃、ピアノを森安耀子の各氏に師事。

2015年10月「ピアノ協奏曲『新生』」、2016年8月「交響曲『連禱』-Litany-」、その後も多くの作品を発表。最近ではテレビやラジオ番組等に出演し、親しみやすいキャラクターとして活躍している。2018年度より桐朋学園大学の非常勤講師に復帰。



9/9

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

9/9

なつかしの名曲〈再発見〉の喜びを!

今回の「休日の午後のコンサート」は、〈ふるきを温ね・新垣先生登場〉。「ふるきを温(たず)ねて新しきを知る=温故知新」は、昔の事柄を調べて新たな意味や価値を再発見すること。ここでは昔の人気曲や古くから愛されている作品が登場します。中でも、スッペ、ボワエルデュ、ケテルビーの作品は、古いファンには懐かしい音楽。かつては有力な入門曲でしたが、最近は演奏機会が少ないので、再発見の喜びを味わえることでしょう。

指揮は、やはり東京フィルと古い関係をもつ円光寺雅彦。そして作曲家・ピアニストとして活動する新垣隆が、映画「アマデウス」で印象深く使われたモーツァルトのピアノ協奏曲第20番の第2楽章を弾き振りし、マルチな手腕を発揮します。ちなみに今から33年前、14歳の新垣少年は、若き円光寺指揮する東京フィルと共演しています。この驚きの過去は、トークで詳しく語られるかも……。

では、ノスタルジックな名曲やエキゾチックな音楽に、たっぷりと浸りましょう!



巧みな話術で知られるマエストロ、円光寺雅彦。往年の名曲と知られざるエピソードをお楽しみいただきます ©K. Miura

オペレッタ序曲の名曲で開幕!

幕開けは、フランツ・フォン・スッペ(1819-1895)の『詩人と農夫』序曲。オーストリアの作曲家スッペは、ウィーンの劇場の指揮者などを務めながら、オペレッタ(喜歌劇)や劇音楽を多数発表し、大人気を博しました。しかし没後は全曲上演の機会が激減し、序曲のみが単独で演奏されるようになりました。本作は、『軽騎兵』と並ぶ代表的な序曲。『詩人と農夫』は、正確にはジングシュピール(歌入りの芝居)で、1846年に作曲&初演されましたが、ストーリーは伝えられていません。



スッペ(1819-1895)

曲は、6つの旋律が連なる明快でメロディアスな音楽。チェロがのびやかなソロを奏でるアンダンテ・マエストーソの部分に始まり、切迫したアレグロの部分に移って、行進曲調の力強い音楽が展開されます。やがて素朴なワルツ風の音楽が登場。力強い部分が戻って終結します。

素朴で優美なフランスの喜歌劇

オペラ・コミック

おつきは、フランソワ・アドリアン・ボワエルデュ(ボイエルドューとも表記。1775-1834)の『バグダッドの太守』序曲。ベートーヴェンと同時代のフランスの作曲家ボワエルデュは、オペラ・コミックと呼ばれる喜歌劇で一世を風靡しましたが、現在は、本作や歌劇『白衣の婦人』序曲、ハーブ協奏曲など、一部にその名をとどめています。



ボワエルデュ(1775-1834)

『バグダッドの太守』(全1幕)は、1800年に作曲、同年パリで初演された代表作の1つ。太守(一般に地方の長を意味しますが、原題の「カリフ」はイスラム国家の最高指導者のこと)が、盗賊にさらわれた美女を救い出し、彼女と結ばれるといった物語です。序曲は、アンダンティーノの優美な序奏で開始。アレグロの主部

では、軽妙な第1主題(トライアングルが効果を発揮)と流麗な第2主題を軸に、華やかな音楽が展開されます。

モーツァルトの転換点、初の短調協奏曲

ここで新垣隆が登場。ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-1791)のピアノ協奏曲第20番より第2楽章が披露されます。1781年ウィーンへ移ったモーツァルトは、ピアノと作曲の手腕を同時に発揮できるピアノ協奏曲を意欲的に作曲し、1782~84年には9曲を発表。耳当たりの良い諸作は、人気上昇に大きく寄与しました。しかし彼のピアノ協奏曲は、1785年に突然、深遠な世界へ突入します。同年2月に初演された本作は、その幕開けを告げる作品にしてモーツァルト初の短調協奏曲。悲劇的、ロマン的な感情表現によって、後世に大きな影響を与えました。

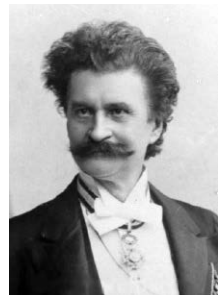
第2楽章(ロマンス)は、二短調の両端楽章に挟まれた、変口長調の緩徐楽章。清澄な主題が穏やかに歌われる天上的な音楽です。ただし中間部はト短調に変わり、激しいフレーズが駆け巡ります。なおこの楽章は、映画「アマデウス」(1984)のラストシーンで効果的に使用されていました。



モーツァルト(1756-1791)

“ワルツ王”ヨハン・シュトラウス2世の代表作

後半最初は、ウィーンの“ワルツ王”ヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)の『ウィーンの森の物語』。1868年6月にウィーンで初演された本作は、作曲者の大規模ワルツの代表作の1つで、ノスタルジックな趣を湛えた音楽です。ただ、一般的には「国外演奏旅行から半年ぶりに戻ったヨハンが、ウィー



ヨハン・シュトラウス2世(1825-1899)

ンへの愛情を込めて作曲した」とされていますが、一方では「ウィーン周辺の開拓地の人々の苦しみが、当地の音楽の引用によって表わされている」と記した資料もあります。最大の特徴は、緻密で長い序奏部。民俗楽器ツィターのソロ(通常は弦楽器のアンサンブルで代用)で知られる部分です。それに5つのワルツが続き、序奏部を回想する形のコーダで閉じられます。

20世紀イギリスのマルチ・ミュージシャン、ケテルビー

今度はアルバート・ケテルビー(1875-1959)の『ペルシャの市場にて』。イギリス生まれのケテルビーは、指揮者、放送局の作・編曲者、楽譜出版社やレコード会社のディレクターなど様々な分野で活躍し、作曲家としては、『修道院の庭で』『中国寺院の庭で』『エジプトの秘境で』などの“ライトクラシック”で名を残しました。

中でも有名な本作は、ペルシャ(現在のイラン)の市場を描いたエキゾチックな音楽。1920年に発表された楽譜には、内容を表すシノプシス(あらすじ。以下「 」内)が記されています。まず「ラクダに乗った隊商が近づき」、やがて(原曲は男声合唱で)「お恵みを」と叫ぶ「市場の乞食たち」が描かれます。そこに「美しい姫君が到着」。哀愁漂う旋律が奏されます。「奇術師」「へび使い」の音楽を経て、「カリフの行列が通過」する荒々しい場面へ。「再び乞食の叫び声」が聞こえ、最後は「姫君も隊商も立ち去って市場は静まり」ます。本作はかつて小学生の時に皆が聞くクラシックの入門曲でしたが、21世紀における生演奏は実に貴重です。



『ペルシャの市場にて』楽譜の表紙

スペイン情趣あふれるロシア五人組・最年少の精鋭の名曲

締めくくりは、ロシア国民楽派「五人組」の最年少ニコライ・リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)の『スペイン奇想曲』。リムスキー＝コルサコフは、海軍軍人出身ながら、独学で作曲技法を学び、管弦楽法の達人として名を馳せました。その代表作が、異国情緒に溢れた交響組曲『シェエラザード』と本作。1887年に作曲され、同年10月ペテルブルグで初演されました。



リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)

本作の主題は、北部のアストゥリアス地方を中心としたスペイン民謡から採られており、カスタネットなどの打楽器を駆使して彼の地の雰^か囲気が描かれます。当初ヴァイオリン独奏と管弦楽のための幻想曲として着想された名残りで、ヴァイオリン・ソロが活躍するのも特徴。他の楽器のソロも豊富に盛り込まれ、色彩的なサウンドが耳を奪います。以下5部分が続けて演奏されます。

アルポラーダ：「朝の歌」を意味する舞曲。明るく快活な幕開けです。

変奏曲：民謡に基づく5つの変奏曲。穏やかな音楽が流れます。

アルポラーダ：冒頭部分の再現ですが、半音高くなります。

シェーナとジブシーの歌：小太鼓のロール(連打)で始まる部分。シェーナ(情景)が序奏的な役割を果たし、ヴァイオリン、各木管楽器、ハープのソロが活躍後、テンポを速めて盛り上がります。

ファンダンゴ・アストゥリアーノ：ファンダンゴは古い民俗舞曲。悠々たる3拍子に変わり、華麗に進んだ後、熱狂的な高揚を遂げます。

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。